

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 20 日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520672

研究課題名（和文） 神護寺領紀伊国かせだ荘の1185年荘園景観の復元研究

研究課題名（英文） Restoration study of manor landscape : Jingoji-ryo Kii-no-kuni Kaseda no Sho in 1185

研究代表者

海津 一郎 (KAIZU ICHIRO)

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号：20221864

研究成果の概要（和文）：荘園現地調査の成果にもとづいて、中世文書を全面的に再検討して、1185年段階におけるかせだ荘の荘園景観を復元した。とくに成立年代が論争になっている文覚井（穴伏川水利システム）が1185年には開削されており、「神護寺領かせだ荘絵図」に描かれた景観も同時期のものであることを解明した。この成果を、地元の教育委員会と連携してフィールドミュージアム地図にまとめ、国土交通省管轄の博物館展示にも反映させた。

研究成果の概要（英文）：

With a clear description of the micro-topography and place names by performing a field survey, were re-examined a full range of books of the Middle Ages. As a result, in the 1185 stage in "Kaseda no Sho", had been excavated already have Mongaku-Yu (R. Anabushigawa irrigation system). The landscape depicted in "Jingoji-ryo Kaseda no Sho EZU" was also found to be accurate as of 1185. This manor landscape of Kaseda no Sho revealed. The result, I have exhibited in the museum of the Ministry of Land, Infrastructure and Transport jurisdiction.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：中世史

1. 研究開始当初の背景

紀伊国かせだ荘研究は、1931年西岡虎之助の先駆的な荘園絵図研究「神護寺領の成立と統制」以来、もっとも標準的な中世荘園として中世社会成立史の研究をリードしてきた。とりわけ歴史教育においては、イメージの明らかになる荘園として1951年に家永三郎・坂本太郎が好学社高校教科書に記

載して以来、中学校（社会科歴史）・高等学校（地歴科日本史）の教科書に必ず取り上げられて中世荘園の典型とされた。荘園領主の神護寺に伝来した荘園領主史料（12世紀の帳簿と絵図を含む）、荘園鎮守神願寺の在地領主史料（現宝来山神社文書）、文覚祭など現地の荘園遺跡や民俗芸能、さらには1996年に発見された中世末期の紀ノ

川本堤防（窪・萩原遺跡）など考古史料という多種多様の史料が、活発な論争を呼び起こした。主要なもののみ挙例すれば、

- ① 京都・在地2枚の荘園絵図の関係と成立時期・契機、荘園の範囲をめぐる論争
- ② 文覚井の成立時期をめぐる論争（12世紀から16世紀まで乱立）
- ③ 西岡の紹介した日根氏開発伝承偽文書（大覚寺文書）の位置づけに関する論争
- ④ 紀ノ川堤防（窪萩原遺跡）の成立時期とその築造主体に関する意見対立、などである。

この荘園をめぐる論争は、中世史の骨格を支える研究者が関わり、つねに中世社会のモデルとなっている。したがって、その論争を決着することによって、新しい中世社会像、すなわちパラダイムを生み出すことが期待されるのである。

2. 研究の目的

本研究は、文治検田帳（坪付帳）の分析を通じて1185年の荘園景観を復元することによって、現在の中世史学界におけるもっとも重要な論争のひとつである神護寺領かせだ荘開発論争を解決・決着させ、もって中世成立期の歴史像を再構成することを目的とする。1986年和歌山大学に赴任して以後目的意識的に進めていた荘園総合調査（紀ノ川～南部川すじ）の成果を前提に、これまで現地に即して分析されて来なかった1185年の検田帳（坪付帳）から当該期の荘園景観（水田分布）を復元し、①荘園絵図の成立時期・契機、②文覚井の成立時期（12世紀から16世紀まで乱立）、③日根氏開発伝承偽文書（大覚寺文書）、④紀ノ川堤防（窪萩原遺跡）の成立時期とその築造主体に関する論争について、見通しを出したい。

3. 研究の方法

1986年和歌山大学に赴任して以後目的意識的に進めていた荘園総合調査（紀ノ川～南部川すじ）の成果を前提に、1185年の検田帳（坪付帳）から当該期の荘園景観（水田分布）を復元し、もって1・2に既述した①②③論争を決着させたい。④についても、12世紀段階の紀ノ川氾濫原水田開発の状況を知ることにより、一定の見通しが設けられるはずである。その際、文覚井一ノ井のみではなく、現地調査によって明らかとなった**穴伏川水利灌漑システム全体の成立過程**を遡及的に追及するという方法を重視する。

すでに2008年刊行の歴史評論論文で部分的な検討を公表しているように、文覚井の源流となる穴伏川（北川・四十八瀬川）の西岸部分の開発が進んでいる点について、これまでの研究は見落としている。現在の最新の成果である地元自治体史『かつらぎ町史』（2008年終結）はこの点が完全に欠落した上

に、荘園総合調査の成果が一切反映しておらず特に問題が多い。本研究では、上記の方法により12世紀の同荘の耕地景観を地図上に復元して、それを維持することのできる灌漑体系を確定し、もって中世社会の地域形成主体について問題提起したい。

4. 研究成果

(1) 得られた結論を時間軸に即してまとめておきたい。

〔第一段階〕一二世紀後半期（中世かせ田荘成立と穴伏川井堰秩序）

紀ノ川に面する下位段丘上の水田耕地を安定化するため、穴伏川（静川）から引水する文覚井（一・二・三ノ井）が開削された。とくに巽ぼう示に至る笠田中・笠田東地区には条里型地割7里余が設定され一ノ井東線により開墾が進んだ。文治元年検田取帳の記載により、荘園領主神護寺勢力が穴伏川井堰秩序の全体を掌握してかせ田荘領域を拡大していたことがわかる（近隣の静川荘・名手荘・志富田荘への侵略）。

〔第二段階〕一六世紀後半期（中近世移行期の紀ノ川統御）

紀ノ川の河川敷にはじめて石造連続堤防（窪・萩原遺跡護岸）が築造され、氾濫原に島地・荒蕪地が広がるという歴史環境が終焉した。一五世紀より紀ノ川流域で中洲地の島畑・芝地等開発をめぐる在地勢力間の係争が見られ、この動向の延長で河川統御が志向されたものだろう。同じ地域では以後数次にわたり堤防の増築が確認されて川幅が圧縮され続け、現在の昭和期堤防に帰結する。

〔第三段階〕一八世紀（紀州藩の紀ノ川新田・街道開発）

高野口小田の井堰から岩出に至る紀ノ川右岸の広域用水路である小田井用水が開削され（一七〇七年に竣工）、堤防内側の沖積低地が水田化した。段丘上の耕地も、文覚井の一・二・三ノ井に依存していた流末部分が小田井の水掛りに切り替わる。これにともない文覚井は段丘北部への水回しを充実するため一部流路を変更した。一八世紀半ば以後、大和街道が沖積低地を通るように路線変更した。

〔第四段階〕二十世紀（現代開発と交通）

一九七九年に和歌山県最大の用水路である紀ノ川用水（奈良県十津川水系猿谷ダム取水、橋本一和歌山間）が完成して、山麓縁辺の洪積段丘上の耕地に水回しが可能になる。この水路のラインに並行する形で、京奈和高速道路が計画され開通間近となっている。

四つの画期ごとに、補足説明を加えたい。

〔第一段階〕については、主に文治元年検田取帳の分析をもとにした考察で、一二世紀段階で文覚井（穴伏川井堰秩序）が成立しているとした点、紀ノ川河川敷開発を否定した点

で、木村茂光・服部英雄・黒田日出男諸氏の先行研究説と異なっている。

〔第二段階〕に至るまでの中世の開発は、文覚井への水量確保によるかせ田地区水田の安定化と、氾濫原における粗放な島畑の集約化という2つの量的な拡大であった。前者は「慶安絵図」に描かれた穴伏川井堰秩序の拡充定着に他ならない。神護寺勢力の主導するその営みは、当然ながら穴伏川の水に依存する静川荘・名手荘など近隣荘園と熾烈な対立を生み出した。

(2) いくつかの論争について・継続課題

① 現地調査と考古学の成果を重視している私たちの研究に対して、文献を重視する立場から中世後期～近世の開発をより重視すべきという批判が加えられた。前田正明氏の文覚井一井東流を近世初期の土豪木村家にひきつけて解釈する立場がその代表的なものであり、今後の検討に委ねたい。前田氏の研究は、一井を孤立的に扱うことなく、穴伏川井堰秩序(水利システム)の一環として理解している点で、私たちと共通の研究基盤に立っており、論争の意義が深い。

② 本研究では、荘園絵図をめぐる論争には触れることができなかった。「かせ田荘絵図」のぼう示表記は、黒田日出男氏が強調したように、「文治元年検田取帳」の示すかせ田荘の実態(志向)を表現している。穴伏川井堰秩序の形成から中世かせ田荘を考えるという視座から、あらためて絵図の史料論に取り組みたい。

③ 最後に、もっとも重要な鍵でありながら、原史料の確認できていない「文治検田取帳」の所在確認についても当然の課題である。

(3) 研究成果の普及と今後の課題について。

成果報告書には、史跡散歩地図とそれを活用した中学校の歴史教育実践の事例を収録している。中学校・高校の日本史教科書で中世荘園の典型事例としてかならず取り上げられている「かせ田荘絵図」であるが、そこに描かれた景観はいまも現地に息づいている。文覚井をはじめとする諸遺跡、文覚上人にまつわる様々な伝承と行事をいまも見ることができる。しかもここでは、古代中世から現代にわたる、人間と大河川・大自然との格闘・共生の歴史を、具体的に体験見学することができる。すでに国土交通省の河川工事事務所と連携して、同省傘下の紀ノ川の展示施設(和歌山市の紀ノ川大堰「水のきらめき館」)において研究成果にもとづく常設展示改変を行った。次の課題は、この成果を「はこもの」内に留めることなく、現地のフィールドミュージアムとして提案することである。

京都・奈良と和歌山をつなぐ高速道路である京奈和自動車道の工事によって、現地一帯では現況の変化が進みつつある。笠田地区の

開通は二〇一三年に予定されている。これを期に、フィールドミュージアムかせ田荘の価値を確認・検証できる仕組みを整えたい。たとえば、次のようなゾーンを設定して、現地の見学コースを整備するプランを提案したい。

本研究では、荘園絵図をめぐる論争には触れることができなかった古代：穴伏川流域と万葉景勝地(妹背山・船岡山国境の紀ノ川)

中世：文覚井(一・二・三井)と笠田東の中世条里開発地と大道

近世：紀ノ川の堤防遺跡(伊都浄化センター内)・大和街道と小田井用水

近現代：「道の駅」の現堤防と紀ノ川用水

これは見学地の一例であるが、ひとつの荘園故地で、これほど立体的かつダイナミックに水をめぐる歴史環境史を体験できる場所はほかにあるまい。堤防遺跡の保存活用を考えることにより、かせ田荘地域を、自然と人間の開発・共生を考えるフィールドミュージアム紀ノ川「水の駅」とする方途を探りたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

- ① 海津一郎、『紀伊国かせ田荘』覚書一共同研究の行方、和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要、査読有、33、2012、pp. 35-39
- ② 海津一郎、西岡虎之助、紀南への旅 民衆史研究のはじまりを告げる一枚の絵公開(シナリオ)、和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要、査読有、33、2012、pp. 111-126 ページ
- ③ 海津一郎、和歌浦・愛宕山の石造物調査一近世和歌山城下町災害史研究事始め一、和歌山大学教育学部紀要・人文科学、査読有、63、2012、pp226-233
- ④ 海津一郎、中世惣国復活プロジェクト、地方史研究、査読有、358、2012、pp34-36
- ⑤ 海津一郎、矢野荘十三日講事件再論一揆張本を売り渡した人々一、和歌山大学教育学部紀要・人文科学、査読有、62、2011、pp47-53
- ⑥ 海津一郎、『紀伊国かせ田荘』始末記一かつらぎ町編纂委員会との15年論争を中心の一、2011、和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要、査読有、32、pp. 27-47
- ⑦ 海津一郎、根来の城、発見と保存の意義、ヒストリア、査読有、227、2011、pp73-81
- ⑧ 海津一郎、『教育実習テキスト・地域文化編一田舎・僻地と思っていないか一』の編纂と活用、和歌山大学教育学部教育実践

- センター紀要、21、2011、pp 17-22
- ⑨ 海津一朗、西岡虎之助「反骨の歴史家」は戦後教科書をいかに変えたかー 歴史地理教育、査読有、774、2010、pp78-83
 - ⑩ 海津一朗、西岡虎之助コレクションの全体像についての覚書き、和歌山地方史研究、査読有、60、2010、pp.1-20
 - ⑪ 海津一朗、鎌倉御家人三浦氏の西国支配と紀伊南部荘、三浦一族研究、査読無、15、2010、pp 7-35

[学会発表] (計7件)

- ① 武内雅人・海津一朗、「根来の城」学術検討会ー乗閣移転地問題シンポジウムー、大阪歴史学会、2012年8月、大阪市立大学
- ② 海津一朗、映画・西岡虎之助、紀南への旅・上映と解説、中世史サマーセミナー、2012年8月、嵐山婦人会館
- ③ 海津一朗、橋本市史中世編合評会・基調報告、紀ノ川流域中世史研究会、2012年6月、和歌山市市民会館
- ④ 海津一朗、中世後期の長期的寒冷化傾向についてー田村憲美説の再検討ー、気象災害研究会、2012年5月、和歌山大学教育学部
- ⑤ 海津一朗、記念映画上映 西岡虎之助、紀南への旅 解説、佐藤和彦追悼シンポジウム、2012年5月、早稲田大学文学部
- ⑥ 海津一朗、藤木久志の矢野荘福島・佐藤批判をめぐって、中世悪党研究会、2011・10月、東京都調布市民会館
- ⑦ 海津一朗・林晃平、1185年における笠田荘の村落景観、鎌倉遺文研究会、2010年3月、早稲田大学文学部

[図書] (計4件)

- ① 橋口定志・海津一朗ほか、高志書院(東京)、中世社会への視角、2013、pp.3-19
- ② 海津一朗、同成社(東京)、中世都市根来寺と紀州惣国、2013、350
- ③ 海津一朗編、同成社(東京)、紀伊国かせ田荘、2011、304
- ④ 海津一朗・吉村旭輝共編、『西岡虎之助民衆史学の出発(たびだち)』和大紀州研年次図録、2010、80

[その他]

- ① 海津一朗、西岡虎之助、紀南への旅ー民衆史研究のはじまりを告げる一枚の絵(和歌山大学「歴史探訪」記録映画1)、2013、pp. DVDビデオ38分
- ② 海津一朗、フィールドミュージアム歴史地図・中世日本の国境地帯(和歌山大学岸和田サテライト)、2012、B1版(2013

改訂新版)

- ③ 海津一朗、西岡虎之助の絵の風景が語るもの、和歌山大学海津一朗研究室、2012、pp.8(2013改訂新版)
- ④ 海津一朗、フィールドミュージアム歴史地図・かせだ荘ー静川・文覚井編一、和歌山大学海津研究室、2011、B1版(2013改訂新版)
- ⑤ 海津一朗、フィールドミュージアム歴史地図・かせだの荘ー紀ノ川・水の駅編一和歌山大学紀ノ川学プロジェクト、2010、B1版
- ⑥ 海津一朗編、教育実習用テキスト 地域文化編、和歌山大学海津研究室、2010、pp.18(2013改訂新版)
- ⑦ 海津一朗(講演会とシンポジウムチューター)、西岡虎之助のかせだ荘研究(かつらぎ町教育委員会講演会)、2011年11月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

海津一朗 (KAIZU ICHIRO)
和歌山大学・教育学部・教授
研究者番号: 20221864

(2) 研究分担者

吉村 旭輝 (YOSHIMURA TERUKI)
和歌山大学・紀州経済史文化史研究所・研究支援員
研究者番号: 80566331